

※ 字数制限がある問題は、「、」「や」「も」一字と数えます。

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

一

話は少し古くなるが、かつて『朝日新聞』の朝刊に毎号「となりのやまだ君」（現在は「のちゃん」と改題）という漫画が連載され、毎回示唆に富んだ内容で読者を楽しませていた。次に紹介する話もその一つだが、言葉の伝達という面で実に面白い。

言葉のやりとりは相互に話題や場面を共有してこそ初めて成り立つ。談話の冒頭は、話し手・聞き手の互いが共通の場面に立つとの了解があるからこそ初めて正しいコミュニケーションが成り立つのであって、そこで初めて話題とする事柄も両者の一致を見るわけである。それがずれていては談話は成り立たないか、誤解の原因となる。その点、先の漫画は、私たちに言語伝達の基本を思い出させてくれる貴重な事例を提供してくれたといえるであろう。同じ『朝日新聞』に以前「ねえねえ、きいて」という小話欄があった。そこにかつて「撮らずに取ってよ」と題して、神奈川県の主婦の、次のような一口話の載ったことがあった。

（平成九年一月十七日掲載）

わが家の玄関の飾り窓にハチが上手に巣を作った。大騒ぎする私。「ハチの巣とって、とって」といったら、主人がカメラを持ってきた。

(平成二年八月十九日掲載)

談話においては、話し手も聞き手も、常に同じ情報を同じ視点でとらえているのだとの了解が基本にあつて、それを前提とした言語の形式が文法や表現・語彙の各面に色濃く現れており、日本語の一大特徴ともなっている。右の例でいえば、玄関に蜂が巣を掛けたという情報に対し、危険だから取りノゾクべきという話し手の視点を、聞き手も当然持つはずだとの認識で「とって、とって」と叫んだのであろう。「とる」が「取る」のほかにも「撮る」のような他の解釈が成り立つなど、とっさの折には思いも及ばない。聞き手であるご主人側は、蜂が巣を掛けたという同じ情報に、珍しいから記念に写真をと、まったく別の視点からこれをとらえている。コミュニケーションにおける理解の成り立ち、誤解や曲解の原因はいろいろあるが、同じ「とる」がいろいろに解釈できるといった言語の形式上の問題以前に、情報や状況に対してどのような視点からそれをとらえているか、表現者や理解者が抱く想念の基盤でもある発想の出発点を正しく見定める必要があるであろう。その点どうもこれまでの言語研究や、国語教育・日本語教育といった言葉の学習では、言語の形式面での問題にばかり目を奪われて、個々の人間が自然や周囲の対象にどのような視点でそのつど向き合っているか、場面や状況から導かれる自然なタイシヨの姿勢・心理状態を正しく理解するといった訓練に欠けていたように思われる。もちろんその折々の視点の有り様とか解釈のパターンには、個人的な恣意性もあるだろう。が、誰しもがそのようにとらえ、同じように考えるといった共通性、似たような傾向も見られるにちがいない。そうなればこれはもう立派に日本的な民俗の在り方、一つの文化といってもいいのではないか。

『古事記』や『日本書紀』が書かれた古代の日本人は、虹は蛇に通じて不吉なものと感じ、なにか異変のゼンチュウと恐れたが、現代人は「七色の虹」などと言って、その美しさを愛でる。科学の発達した現代では、虹の立つ現象など少しも恐ろしくはない。いっぽう、古代ヨーロッパでは、虹が立ったらその根元を掘れ。そうすれば宝物が出てくると喜んだそうだが、同じ対象に対して、洋の東西・古今の時代差で、まったくその見る視点が異なってくる。このような民族ごとの文化的視点の相違もあれば、もっとミクロな、個々人ごとの視点の違い、その折々の状況や心理的差異に左右される視点の「ゆれ」も、もちろんあるだろう。籠に盛られた果物を見て、食いしん坊は「うまそうだ」と感じ、商売人は「値段はいくらぐらいするか」と考え、絵描きさんは「静物画のソザイとしていいな」と見て取る。味か、値段か、外見か、その見るところは人さまざまで、対象や事象に向けられる表現者の視点を正しく推し量るのは容易ではない。

(森田良行『日本人の発想、日本語の表現』一部改)

【注】1 語彙……用いられている語の全体。

2 恣意……自分勝手な考え。

3 民俗……民間に伝承されてきた習慣。

4 ミクロ……非常に小さいこと。

問一——線①「示唆に富んだ」の意味として正しいものを次のア～オの中から選び、記号で答えなさい。

- ア それとなく教えられることが多い
- イ 比喩的に表されることが多い
- ウ 感心させられることが多い
- エ はっきり指し示さないことが多い
- オ 面白くて相手を楽しませることが多い

問二—— で囲まれた部分に入る話は、全部で五つの文で構成されている。次のア～オを正しく並び替え、その順を

記号で答えなさい。

- ア いっぱう大家^{おおや}さんは、駅の拾得^{しゅうとく}定期券の掲示^{けいし}について話していたつもりなので、「え？」と言ったまま言葉が出ない。
- イ 大家さんも、「そりゃ、めったにあることじゃないからねー」と言葉を合わせる。
- ウ それを聞いた彼女も「え？」と言って、相手が何の話をしているのかわからなくなってしまう。
- エ 山田荘というアパートの大家さんが借家人の女性に「よー先生、みたよ。名前出てたね」と言うと、その女性は最近なにかの雑誌に載^のった自分の入選作品のことと勘違^{かんち}いして、「はじめてなんですよ。なんか恥^はずかしいわ」と、顔を赤らめる。

オ ここまでは実に順調に言葉のやりとりが進んだのだが、これを聞いて彼女はうれしくなって、「入選作^{けいせんさく}を掲載^{けいさい}してもらったんですよ」と控^{ひか}えめだが、つい自慢^{まん}してしまう。

【注】 拾得定期券の掲示……拾われて届けられた定期券に関する情報が書かれている掲示板。

問三——線②「言語伝達の基本」とは、ここでは具体的にどういうことを指していますか。本文中から簡潔にまとめた一文を抜き出し、初めの十字を書きなさい。

問四——線③「表現者や理解者が抱く想念の基盤でもある発想の出発点」とありますが、これについて次の(1)・(2)の問いに答えなさい。

(1) A「表現者」・B「理解者」それぞれを、本文中で使われている別のことばに書き改めなさい。

(2) ここという「発想の出発点」を『朝日新聞』に載った一口話に当てはめた場合、A「表現者」・B「理解者」それぞれの「発想の出発点」を表す表現を本文中からそれぞれ五字で抜き出して答えなさい。

問五——線④「対象や事象に向けられる表現者の視点を正しく推し量るのは容易ではない」とありますが、それはなぜですか。本文中のことばを使って七十五字以内で説明しなさい。

問六——線 a～d のカタカナを漢字に直しなさい。送り仮名が必要な場合は、送り仮名も書きなさい。

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

「まだ締め切りには少し時間があるけど、そろそろスタメンは決定した方がいいかなって」
ほら来た。

どうしてここに、会長の茜あかねがいないんだろう。

——こういう話って、役つきの会員がそろって説得するものじゃないの？ 落とすメンバーには、
瑞穂みずほの頭の中に、いろんな声が渦うずまく。

——でも、あんたが落ちるとはまだ決まっていけないじゃない。

「うちの一年生三人のことなんだけどね」

トーコのきびきびした声で、瑞穂はまた現実現実に引き戻もどされる。

①「私たち、あの三人をA V D担当たんとうって勝手に呼んでるんだけど」

「A V D？」

「そう。『A』はオーディオ、つまり音声担当。三田村理香みたむらりか。声に出した時の言葉の響ひびきにすごく敏感びんで、センスがあるでしょ」
「そうね」

たとえば今日の練習でも。歳時記さいじをめくりながら、突然理香はこんなことを言い出した。

——ねえ、『神田川祭かんだがわまつりの中を流れけり』って、この句、すごく晴れ晴れしてますよね。それ、
I段の音がいっぱいあるからじゃないでしょうか。ほら、十七音の内九音もI段。だからとてもおめでたい感じなんだと思います。

——わかったわかった。理香。わかったから、実作に戻ろう。

トーコは軽くあしらったが、瑞穂には新鮮せんだった。音で俳句を楽しむなんて。

それを思い出しながら瑞穂は続けた。

「たしかに。それと、理香って声もすごく通って聞きやすい気がする」

「そうだね。あの子いい声してる。さすが、一人カラオケが趣味で、カラオケボックスにマイキーボードを持ち込んで弾ひき
語りするのがストレス解消法しょうほうって言うだけあるわ」

「ふうん」

理香とトーコはそんな話もできているのか。瑞穂は一度も一年生とプライベートな会話ができていないことに、今気づいた。
そう言えば、この間ほかの会員がカラオケに行くと言っていたつけ。でも音痴おんちを気にしている瑞穂はことわってしまったのだ。

「マイクの使い方もうまいしね。それがカラオケのおかげっていうのは笑っちゃうけど、大事な能力よね。俳句甲子園こうしんでは
互たがいに相手校の句を鑑賞かんしょうして発表するのにマイクを使うから、そこでもたまたましている学校はやっぱりパフォーマンス力が欠
けると思われやすいもの」

瑞穂は無言でまたうなずいた。認めたくないが、今抱いだいているこのネガティブな感情は、嫉妬しとどだ。

下級生相手に。瑞穂の気も知らないトーコは、次の話を始めている。

「そして『V』はビジュアル担当北条真名ほうじょうまな。書道何段だったかな、とにかくそっちでも大会に出られるくらいの腕前うでまえで、視
覚うっかに訴える字面づらを選別できる」

「うん」

それもよく知っている。

真名は会員の句を毛筆で大きな紙に清書してくれる。それを遠くから見ると、たしかに印象が変わる句があるのだ。いつも自分のパソコンに句を作りためていた瑞穂には、これも新鮮な体験だった。

「そして最後の『D』はデイベート担当、桐生夏樹。論理を組み立てるのが得意で人の言葉尻にも敏感。悪く言えば揚げ[Ⅱ]取りが上手なだけなんだって本人は気にしてるけど」

「ううん、しゃべれるってことはそれだけで俳句甲子園には強いと思う。彼女、この間全校集会でクラス代表としてしゃべってたけど、たしかに全然あがってなかったし」

——俳句甲子園で勝利をおさめるにはどういう戦術がいいか。

新野先生が力説していたことだ。

——ポイントの第一は、鑑賞点をもぎとること。

トコもあれを思い出していたらしい。

「新野が言っていた通りよね。鑑賞点があるの言う本番で、とにかく話し続けられる人間は強い」

瑞穂はじつとトコの話を聞いていた。トコの言うとおりだと思うけど、それにしても。

——私たち、ね。

その中に瑞穂は含まれない。茜会長とトコは二人だけで、もう全部決めていたわけだ。

「そうだね、トコ。私もそう思う」

③複雑な気持ちを押し隠して、瑞穂は静かにうなずいた。たしかに、一年生三人は強い戦力だ。ここで、私はどうなるのよなんて見苦しくわめくのは、情けなさすぎる。瑞穂にだってプライドがある。

「それと、やっぱりうちの主軸は会長の茜でしょ」

「うん」

これもそのとおりだ。須崎茜は、一見ふわふわしているが、俳句に関してはすごくシビアだし熱心だし、実際、王道の俳句を作り続ける。先生の言うポイントの第二、「七点の句」を。先週の練習試合でも、今日の俳句でもそうだった。

瑞穂にはそれができない。教科書通りの句を作るなんて、かえって恥ずかしいと思ってしまう。自分にしか作れない。すごくとんがって、人を驚かすような句でなきゃ、作る意味がないと思う。

なのに、評価されるのは、『骨法正しい』と言われる須崎茜の句の方だ。

でも、いい。俳句甲子園の場であって『骨法正しい』俳句は評価が高いんだから、須崎茜をはずすことはできない。

「これで四人。で、最後の一人なんだけど」

もういいよ、トコ。

——こんなに丁寧に、外堀をじりじり埋めるみたいにして、私がいかに知らない人間か説明してくれなくてもよかったよ。そんなところ、もう最初からわかってたから。

一年生三人の能力も、茜会長の才能も、いまさら確認してもらわなかったってわかった。そして、このトコ。

俳句は初心者だと言うし、たしかに句はぱつとしないが、夏樹に負けなくらいしゃべりは得意だし、頭の回転の速さは夏樹以上。対戦時間の短い俳句甲子園——鑑賞時間は一句につき、たった三分（決勝戦をのぞく）——で、一番鑑賞点獲得に貢献できるのはトコに間違いない。

つまり。

——私、井野瑞穂はいらない人間だ。

別にこういう経験は初めてじゃない。

自分がすごく得意なジャンルだ、みんなに認められてるって思っていたフィールドで、気がつけば誰にも相手にされない

Ⅲ だったと思ひ知らされるのは。

かまわない。俳句を続けたいって思ったのは、俳句続けてますってアピールしたい人がいるからだ。瑞穂はその人とつながり続けるために俳句をやっているのだ。俳句甲子園なんかどうでもいい。

そう思おうとするそばから、別の自分がささやく。

——どうでもよくはないでしょ。俳句甲子園に出ますって言ったら、きっと応援してくれる、褒めてくれる、そう期待したのも事実じゃないの。

「……だから瑞穂、お願いね」

「え？」

しばらく、トーコの言葉の意味がわからなかった。

それから、目を丸くしてトーコを見る。

「トーコ、今何て？」

「瑞穂、五人目のメンバーになって。実際に試合での順番を決めるのはもう少しあと、実際に句がそろうまで延ばすけど。顧問の意見も聞かないといけないしね」

「ちよつと待つて。じゃ、トーコは？」

瑞穂はまだトーコの提案に半Ⅳ半Ⅴだ。だが、トーコはあっさり答える。

「私は補欠に回る」

「どうして？」

「私は創作ができない人間なの」

「そんなことないよ、みんな初心者なのは一緒じゃない」

ちよつと心にもない言い方かな。でも、全くの嘘でもない。瑞穂も自信をなくしかけているところだ。

トーコは不思議な笑い方をした。

「酷だなあ、瑞穂」

「え？」

「瑞穂にはわからないか。世の中には、そういう才能がない人間もいるんだよ」

「俳句を作るのにそんな特別な才能なんて必要かなあ」

長編小説を書くわけではないのに。ところが、トーコの目がきびしくなった。

「できる人間にはわからないのかな。さかあがりができない人間は、自分がどうしてできないのか説明できないでしょ。それと同じだよ。音痴の人間にどうして音はずしちゃうのよって聞くのは酷じゃない？」

瑞穂が返事を探している間に、トーコはさっさと出て行ってしまった。

【注】 1 骨法正しい……俳句を作る際に、守るべき約束事がきちんと守られていること。

(森谷明子『春や春』一部改)

問一 ———線①「私たち」とありますが、誰のことを指していますか。本文中の名前ですべて答えなさい。

問二 本文中の空欄Ⅰにあてはまることばを答えなさい。

問三 ———線②「今抱いているこのネガティブな感情」とありますが、この「感情」は、誰のどのような「感情」ですか。
三十字以内で具体的に説明しなさい。

問四 本文中の空欄Ⅱにあてはまる、身体の一部を表すことばを漢字で答えなさい。

問五 ———線③「複雑な気持ち」とありますが、このときの瑞穂の心情を百字以内で説明しなさい。

問六 本文中の空欄Ⅲにあてはまる最も適切なことわざを、次のア～カの中から選び、記号で答えなさい。

- | | | | |
|---|------------------------------|---|--|
| ア | 河童 <small>かっぱ</small> の川流れ | イ | 猫 <small>ねこ</small> に小判 |
| ウ | とらぬ狸 <small>たぬき</small> の皮算用 | エ | 井 <small>い</small> の中の蛙 <small>かむす</small> |
| オ | 閑古鳥 <small>かん</small> が鳴く | カ | からすの行水 |

問七 ———線④「目を丸くして」とありますが、誰がなぜ「目を丸くし」たのかを具体的な内容をふまえて説明しなさい。

問八 本文中の空欄ⅣとⅤにあてはまる漢字一字をそれぞれ答えなさい。

問九 ———線⑤「心にもない言い方」から読み取れる、瑞穂のトーコの俳句に対する評価が最もよく表れている部分を、本文中から十字以内で抜き出して答えなさい。

国語解答用紙

受験番号

氏名

◆ 字数制限がある問題は、「、」「や」「。」も一字と数えます。

一

問一

問二

問三

問四

(1) A

B

(2) A

B

問五

問六

a

b

c

d

二

問一

問二

問三

問四

問五

問六

問七

問八

IV

V

問九